

論文審査の要旨
Summary of Dissertation Review

博士の専攻分野の名称 Degree	博 士 (学術)	氏名 Author	EAM PHYROM
学位授与の要件	学位規則第 4 条第①・2 項該当		

論 文 題 目 Title of Dissertation
A Study on the Relationship between Research Ability and Mindset of Cambodian Faculty Members and Their Research Outputs: A Perspective from Fifteen Higher Education Institutions

論文審査担当者 Dissertation Committee Member	
主 査 Committee Chair	広島大学大学院国際協力研究科 教授 堀田 泰司 印
審査委員 Committee	広島大学大学院国際協力研究科・教授 馬場 卓也
審査委員 Committee	広島大学大学院国際協力研究科・教授 吉田 和浩
審査委員 Committee	広島大学高等教育研究開発センター 准教授 村澤 昌崇
審査委員 Committee	東京大学大学院教育学研究科 准教授 北村 友人

〔論文審査の要旨〕 Summary of Dissertation Review

本論文は、教員を対象とするアンケート調査の統計分析と国際機関、政府、大学関係者と教員を対象とするインタビュー結果の定性的分析を用いてカンボジアではまだ実証事例の少ない大学教員の研究活動に影響する要因を特定することを目的とした実証研究である。カンボジアでこれまで行われてきた先行研究は、政府や国際機関、そして高等教育機関を対象とした政策・戦略分析的な調査が多く、大学教員に直接、実情を問いかけた大規模な実態調査は、行われてこなかった。しかし、本研究は、大学教員が自ら回答した研究活動に関するアンケート調査並びにインタビューを通して、教員が実際に置かれているより現実に近い状況を様々な視点から捉えた研究であり、これまでのマクロな政策分析を中心とする研究とは異なる実証研究である。

アンケート調査では、カンボジアの都市部にある 15 大学において 483 名の被験者を抽出し、それらの大学教員の研究活動に関するアンケート調査を単独で実施し、大掛かりな定量的分析を行った。そして、質的調査として、政府関係者、国際機関代表、大学代表、そして教員の合計 50 名に対しインタビューを実施し、特に研究を活発に行う大学教員の傾向と特徴について、その実態が把握できるよう定性的分析を行った。さらに 483 名の定量的分析を行う上で、研究を行っていない教員のサンプル数が 7 割以上と非常に多いため、通常の分析に加え、ゼロ過剰な負の二項分布回帰分析モデル (Zero-inflated negative binomial regression analysis) の手法を用いることで、研究を活発に行っている教員に影響する促進要因を特定した。

論文の構成は 10 章からなり、第 1 章では、問題の所在、本研究の目的と重要性、そして、4 つの研究課題と研究方法、さらに論文全体の構成について説明した。第 2 章では、大学教員の研究力に関する先行研究をまとめ、さらにカンボジアの高等教育の歴史、背景、そして、研究活動に関する文献を取りまとめた。第 3 章では、本研究が展開するデータ分析の視点並びに分析方法に関する socio-ecological な分析という社会の異なるレベルのステークホルダーの関係をモデル化した基本概念について概説し、第 4 章では、研究の方法に関し詳細な説明を加えた。そして、第 5 章では、本研究の第 1 課題である大学教員の研究活動の実態につい

てデータ分析結果を報告し、第 6 章では、第 2 の研究課題である大学教員の研究への志向と研究能力についてデータ分析を行い、第 7 章では、第 3 の課題として、大学教員の所属機関や政府、研究資金提供団体の影響について分析を行った。第 8 章では、第 4 の研究課題である研究活動を促進する要因をゼロ過剰な負の二項分布回帰分析を使い明確に指摘し、第 9 章では、全体の傾向について、インタビュー結果等も交え、総合的な分析とディスカッションを展開し、第 10 章で結論を導いた。

以上の構成に基づき、本論文では、カンボジアの大学教員による研究活動の現状と阻害・促進要因について多くの点が論証されたが、重要な論点としては、以下の点が論じられた。

第 1 に、カンボジアの大学教員の研究活動の現状を理解する上で、最も重要な点は、研究活動は、実際に研究を遂行できる人口が極端に少ないため、一極集中型の傾向がある点である。一人の研究者に多くの研究機会が集中し、最終的な統計分析では、研究機会を得る研究者の資質並びに動機、そして過去の実績が、教員の研究活動を促進する最も影響力のある要因であるという結論に達した。これまでの先行研究において指摘された「研究の機会を提供する大学や国際機関、そして、研究より教育を重視した給料制度等」という外的要因の影響力は、引き続きあるものの、本研究は、個人の能力と資質の方が研究活動の促進に、より直接的影響を及ぼすということを実証した。第 2 に、そうした研究能力並びに動機を持った大学教員の多くは、海外で学位を取得した教員が多く、特に先進国の研究活動を中心とする大学院教育が大きく影響していることも明らかになった。第 3 に、研究活動をあまり行わない教員が抱える大きな阻害要因としては、研究活動が中心ではない特に国内の大学院教育の影響が大きく、そうした教育を受けた教員は赴任後も、研究活動に積極的に参加できない状況にあることが判明した。また、それらの研究活動をあまり行わない教員の多くは、国内に限定された論文発表が研究活動の中心となっており、その成果をさらに国際的に発展させることは難しい状況におり、さらに、教員の業績評価に研究活動が考慮されないことから研究を負担に思う教員が多いということも実証された。

本研究論文に関して、審査員全員が（１）対象としたサンプル数が大きく、カンボジア都市部の高等教育における教員の研究活動と影響する要因の実態を把握するのには、十分である、（２）データは、統計的に因子分析を行い、さらに 50 名の関係者へのインタビューも実施し、様々な視点から相対的に分析・検証されており、信頼性が高い、（３）研究テーマ並びに課題は、カンボジアの高等教育の研究力向上に直接関係したものであり、カンボジア全体の高等教育の発展に直接貢献できる重要な研究であるということを認めた。また、予備審査で指摘された一部の論旨の再構成や 9 章並びに終章における調査結果の原因に関する総合的な分析も充実させ、加えて、本論文に関連した査読付き論文数も予備審査では 2 編であったのをさらに 1 篇、業績を伸ばしていることから、審査委員会は、本論文は学位請求論文として充分であり、申請者が博士（学術）の学位を受けるのにふさわしい学識と資質を有すると認め、全員一致で合格とした。